

さようなら
こゝろに
は
竜生
人生19

GOOD BYE
DRAGON LIFE.

永島ひろあき
HIROAKI NAGASHIMA



目次

第一章	王太子からの依頼	7
第二章	運命の女	51
第三章	リネットの独り立ち	123
第四章	予兆	200
第五章	収穫祭	233

主な 登場人物

MAIN CHARACTERS

ドラン

最強の古神竜“ドラゴン”の
転生した姿。
クリスティーナの下で
故郷ベルン村の発展に
取り組む。

エドワード

魔法学院の若手教授。
天人の研究に
心血を注ぐ。

ドラミナ

ドランの婚約者で
よき相談相手の
元バンパイア
クイーン。

クリスティーナ

“竜殺しの因子”を受け継ぐ
絶世の美人剣士。
ベルン男爵に
叙された。

セリナ

ドランと婚約を果たした
ラミアの美少女。
ドランの心の拠り所
でもある。

ディアドラ

妖艶な黒薔薇の精。
ドランの恋人の一人で
リネットを娘のように
思っている。

リネット

ドランの従者を務める
リビングゴーレムの
少女。

第一章——王太子からの依頼

新たな春の季節にアークレスト王国最北部辺境に興おこされたベルン男爵領だんしゃくりようは、その出発から半年を経へずして、とんでもない事件に襲おそわれた。

悪名高い大邪神カラヴィスの名を冠かんする建造物——カラヴィスタワーが領内に出現するという、世界中の統治者が頭を抱えて神々を呪いたくなるような一大事である。

一つ対処を誤れば、禁教に指定されているカラヴィス教との関係を疑われて、男爵家の取り潰しもあり得る。さらに、塔の内部に囚とらわれていたサキュバス達が、古神竜ドラゴンの転生者であるドランの眷属けんぞくになるという予想外の事態まで発生した。

しかし、ドラン達ベルン首脳陣の奮迅ふんしんに加えて神々の協力もあり、なんとか穏便おんべんな方向で一段落を迎えられたのは誠に幸さいわいだったと言えよう。

こうした予想外の事態に見舞われながらも、出だしに成功したベルン領には、それまで様子見に徹していた商人や冒険者、移住を考えていた者達が本格的に集まりだした。

宿泊施設と交通網の整備、積極的な広告活動のお蔭もあって、ベルン村にはかつての開拓計画の全盛期に勝るとも劣らない賑わいが戻っている。

十

ガロア魔法学院を卒業し、ベルン男爵領の領主となったクリスティーナの一日は、日の出と共に始まる。

起床の時間は学生時代と変わりではなく、同じ部屋で寝起きしている使い魔の不死鳥ニクスに促されて目を覚ますのも同じだ。

鶏ではなく、不死鳥の子供が朝を告げるとは、ある意味豪華である。

近頃は、固有の人格を持つ愛剣『ドラッドノート』が、少年ないしは少女の姿で顕現し、ニクスと交替で起こしに来るようになっていた。

この様子からも、両者の関係は良好であると窺え、主人であるクリスティーナとしては大変喜ばしかった。

「クリスティーナ、起床の時間です。本日は一日中晴天となるでしょう」

今日の目覚まし役は、少女の姿で顕現したドラッドノートだ。

就寝時は有事に備えて剣の状態でベッドの中に持ち込まれて、クリスティーナに握られているが、

目覚まし役をする時は人間の姿に変わって枕元に立つ。

「ん……ああ、おはよう、ドラッドノート。いつもありがとう」

クリスティーナは幼少期に母と流浪の生活していた際の習慣から、僅かな物音や変化ですぐに目を覚ます。

ドラッドノートに声を掛けられた時点ではほぼ完全に覚醒し、顔からは眠気が完全に払拭されていた。

ニクスも愛用の止まり木の上で目を覚ましており、主の代わりと言わんばかりに大きく嘴を開けて欠伸している。

クリスティーナの寝室は新興の男爵家として十分な広さを備え、ベルン近隣の土地から集められた調度品が並んでいた。

エンテの森産の古木を用いた衣装箱や、海底で何千年も生きた貝の貝殻を使った見事な透かし彫りのランプなどは、交友関係を分かりやすく示す品だろう。

決してこれ見よがしな華美さはないものの、価値の分かる王侯貴族なら目玉が飛び出るような希少な品が並んでいる。

ただ、部屋の主であるクリスティーナに勝る宝は一つもないと、誰もが認めるところだ。

「侍女を招き入れてもよろしいですか？」

ベッドを下りたクリスティーナに、ドラッドノートが確認した。

寝室の外では着替えの準備を整えた侍女達が入室の許可を待っている。

返事をする前に、クリステイナはベッド脇の棚に置いた、容貌を醜く変化させる効果のある『アグルアの腕輪』を手早く身につけた。美しすぎる彼女が下手に素顔を晒すと男女問わず魅了してしまふ為、生活や執務に支障が出ないように日頃から外見を補整しているのだ。

「ああ、もう構わないよ。入ってもらってくれ」

現在、この館のメイド兼遊撃騎士団の団員として、リビングゴレームの少女——リネットが籍を置いているが、クリステイナの世話は、他のメイド達も行なう。

専属秘書であるバンパイアクイーンのドラミナや、補佐官のドランを含め、周りを、身内ばかりで固めるのは健全とは言い難いと考えたからだ。

それに、クリステイナの父方の祖父、先代のアルマディア侯爵に仕えていた経験豊かな者達が働きに来てくれている。彼らの指導のもと、人材の育成も兼ねて、新しいメイド達にも身の回りの世話を委ねているのだ。

ドラッドノートが小さな銀の鈴を鳴らすとすぐに扉が開き、年齢も種族もバラバラな四人のメイドが入ってくる。

「おはようございます、男爵様。本日のお召し替えを始めさせていただきますたく存じます」

真っ先に口を開いたのは先頭に立つメイド長だ。巻角と柔らかな白髪が印象的な羊人の老女である。先代アルマディア侯爵に仕えていた者の一人で、ベルン男爵領ではメイドとして最も確かな経

歴と経験を持つ、貴重な人材だ。

彼女に続くのは、耳と腕の付け根から手首にかけての被膜が特徴の蝙蝠人、体の一部が皮膚ではなく甲殻に覆われている蟹人、クリステイナよりも年下の小柄な純人間種の少女。この四人が、本日の担当だった。

ちなみに、美の概念を超越するほどに美しい主人の肌や髪に触れ、その姿を間近に見なければならぬメイド達にとっては、一回一回の着替えが途方もない死闘である。何しろ、あまりの美貌にやられて男女問わず失神しかけるほどのだから。

そんな彼女達の心中を知ってか知らずか、クリステイナが一礼する。

「よろしく頼む」

こういう場合、黙ってメイド達に身を任せるのが、貴族らしさなのだが、クリステイナが実践出来るようになる日はまだまだ遠そうだ。

メイド達の方も腰の低さの抜けない主人には慣れたもので、黙々と衣装箆筒を開いて準備を始める。

基本的にクリステイナは、動きやすさが第一、次に価格の低さを優先して服を選ぶ傾向にある。彼女は幼少期から人生の半分以上の時間を貧困に喘いで暮らしてきた為、衣食に不自由な生活を送れるようになってからも、好みに変化はない。

彼女が身につけたのは、最上級の素材を使ったフリルを襟や袖にあしらった白のブラウス、動き

やすさを重視した革のズボン。白銀の髪を束ねるのは金糸の刺繍が施された青のリボンで、首元を飾るリボンも同じく青と、学生時代とほとんど変わらぬ出で立ちだ。

これには流石のドラン達も少し呆れている。

屋敷の中では帯剣はせず、少女姿のドラッドノートを後ろに従え、ニクスを左肩に乗せて、クリステイーナは寝室を出る。

身だしなみを整えたら、次は朝食だ。

彼女の人生において、食事は常に最大の楽しみであり、癒やしであり、救いであった。

しかも、生涯の伴侶と定めたドランがおり、最愛の友人達——ラミアのセリナや黒薔薇の精ディアドラ、ドラミナも同席する、賑やかな食卓だ。今やクリステイーナにとっては人生で最も楽しい時間になっている。

普段の食卓では家長の座る席にクリステイーナが腰掛けて、彼女から見て右手側にドラン、その隣にセリナ、左手側にはディアドラとドラミナという席次だ。

最近ドランに保護されて身内に加わったリネットは、愛らしいメイド服姿で、給仕の為に控えているメイド達の列に並んでいる。

ドラッドノートは、クリステイーナの愛剣としては先輩にあたる『エルスパード』を抱えて、主人の右後ろに立つ。その場所ならば、必要な際にはいつでもクリステイーナの右腰に収められるからだ。

無論、食事の席でも、使用人達の「気苦労」は続く。

クリステイーナのみならず、ドラミナという絶世の美女まで加わるのだから、二人を同時に視界に収めてしまうと、眩暈に襲われてどんな粗相をしでかすか分からない。むしろ、それで済めばましなくらいだ。

結局、使用人達はクリステイーナとドラミナの顔を直視せず、手元を見るように徹底して対応せざるを得なかった。

そんな中、クリステイーナがにこやかに口を開く。

「みんな、おはよう。今日もこうして顔を合わせられて、本当に嬉しいよ。まだまだ忙しい日が続くけれど、まずはお腹を満たして、一日頑張ろう」

身内相手とはいえ、堅苦しい挨拶ではなく、穏やかな励ましの言葉から始まったのは、実にクリステイーナらしい。

+

朝食を済ませて心身共に栄養をとった後は、早速仕事の時間である。

「ルメル子爵からの紹介状をお持ちのこちらの方はシロ、元ヴェイクル侯爵家の執事の方はクロです」

クリスティーナの執務室に置かれた秘書用の机では、ドラミナが直近の就職希望者の書類審査をしている最中だ。

彼女はベルン男爵領の内情調査を行なう為の密偵と、純粋な就職希望者を選別していた。

これには、彼女が事前に放った蝙蝠の使い魔がもたらす情報と、道中の木々や草花が聞いた会話などが判断基準になる。

世界樹——エンテ・ユグドラシルや、黒薔薇の精ディアドラの全面的協力を得ているベルンならではの情報網だ。

「今日も胸の内に隠し事をしていらっしやる方がたくさんおいでのようで」

ドラミナはバンパイアの国の女王であった時代にも似たような情報戦をした経験がある。それを感じ出して、楽しそうに笑った。

しかし、経験豊富な元女王陛下はそれでいいかもしれないが、新米領主のクリスティーナは、白黒入り混じる就職希望者に辟易している様子だ。

「一癖ある連中といっても、労働力としては有能だから、追いつかうのは勿体ない。おまけに、紹介状があると断りにくい。知られても構わない。餌としての情報をいくらか掴ませて、後は身を粉にして働いてもらえばいいか」

「ドランの魂やドラッドノートの本当の由来と比べれば、大概の事は重要な情報ではないと、ついつい錯覚してしまうのには、気を付けないといけませんよ」

ドラミナにやんわりと忠告され、クリスティーナが苦笑する。

「普通の領主としての感覚を養わないと、色々と失敗しそうだからね。とにかく、多少の曰く付きや思惑を抱えた人材も、構わず採用して利用させてもらおう。しかし、人事採用でこうも悩むとは……。そこに思い至らなかつた私が浅はかつたよ」

クリスティーナは机の上に置かれたいくつかの籠の一つから、また別の書類を取り出した。

ベルン男爵領には、いわゆる内政、文官系の就職希望者ばかりでなく、武官としての希望者も大挙して押し寄せている。

クリスティーナが手にした書類は、そちらの希望者達をまとめたものだ。希望者が集うのは一向に構わないのだが、その売り込み方にはいささか悩まされている。

具体例を挙げると、複数の武芸者が屋敷の前で剣やら槍やらを振り回したり、遠くの的に矢を当てたりして実力を誇示しはじめたのだ。

流石にこれには参り、武官に関しては定期的に大会を開いて採用試験代わりにする方向で検討している。

「ドランをはじめ、私達のような特殊な人材の力に依存して領地を回すよりも、凡人による代替可能な治世の方が、長く繁栄するものですよ。将来の為にここは心を強く持って、毒にならぬ程度に能力を持った人材を集めましょう。とはいえ、平凡な人材だけでは発展性に欠けます。奇人と呼ばれるような突出した才能も一定数は集めないとけませんし……。ふふ、難しいものです」

正直、ドララン達は、なんでも出来る」と言っても過言ではないが、それで万事を片付けられるのは今の世代までだ。

このやり方がベルン男爵領における主流となってしまうては、次以降の世代の領地運営は上手くいかなくなってしまふ。

もともと、バンパイアであるドラミナを筆頭に、女性陣はほとんどが長命な種族なので、次世代までの期間は彼女達が自主的に譲らないとかなり長いものになるかもしれないが。

それでも、やはり普遍的な運営体系を構築するべきだというのが、ドラミナの、そしてベルン首脳陣の共通認識である。

「領主としての大先輩の助言、心に刻んで参考にするよ」

そう言つてクリステイナは、早馬の群れの如く押し寄せる仕事を片付けるべく、新たな書類に目を通す。

冒険者ギルドのベルン支店の開設計画の進捗、各地から次々とやつて来る各教団の神官達への対応に、各教団の教会ないしは神殿の建設要請など……

ある程度は補佐官であるドランや、会計責任者のシェンナらが処理するとはいえ、最終的な決定はクリステイナが下さなければならぬ。

秘書を務めるドラミナも、助言したり仕事の効率化を図ったりはしても、決裁や認可印を押す作業に関しては、クリステイナの判断に委ねている。

その為に、クリステイナはドラッドノートを半常態的に実体化させて、仕事の手伝いをお願いし、慣れない「領主仕事街道」を爆走中であつた。

「カラヴィスタワー入口の交換所と宿泊施設、医院の建設は完了。ええと、各教団の教会の建設要請で、村の中だけでなく塔の方にも希望ね。寄進はするし、土地も用意するが、建設費と資材と人員は用意してもらわねば困るな」

クリステイナは、執務机の上に積まれている選別済みの書類に目を通し、確認の意味も含めて内容を口に出しながら、吟味を重ねていく。

次に彼女が手に取つたのは、カラヴィスタワーでドランが眷属にした「ドラグサキユバス」の代表者、リリことリリエルティエルからの報告書だ。

「リリ達からの人員派遣第一弾の表はこれか。娼館の従業員兼娼館付き神官枠で採用、つと。この他にお針子、料理人、文官、武官、商人としての就労を希望する者も複数？ なるべく男性の居ない職場に——いや、男も女も淫魔には同じ話か。淫魔としての本能を抑えてくれると助かるが、そこはドランの眷属と化しているのだから大丈夫……大丈夫だろう、大丈夫だよな？」

クリステイナが書類を読み終えて、認可するものとしらないものを別々の箱に分けながら判断する速度は、老練の領主にも負けない。領主としての経験はなくとも、基礎的な知力と体力が文字通り人間の域を超えているお蔭だ。

窓の外から差し込む陽射しは暖かく、執務室の中で焚かれている香木からは、精神と神経を落ち

着かせる淡い香りが立ち昇っている。

眠気覚ましのお茶を口にした直後でも、すぐにうたた寝の誘惑に負けそうな心地よさであるが、脳を全力で稼働させているクリスティーナには、夢の国からの使者も近づけない。

「ふうう、タワー関係はこれで一区切りか。それにしても、冒険者ギルドは動きが速い。ベルン村だけでなく、タワーの方の支部開設をもう打診してくるとは。いや、各教団の本拠地や地方の本部からも人が来ているし、商人達の動きから見ても何かあると踏むのは当然だとドラランが言っていたしなあ。こうなると、また会談の予定が増えるのか。あれは必要以上に時間を取られる事が多いのがなあ……」

熟練の商人達は少しでも自分達の利益を増やそうと、あの手この手で弁舌を振るう。

敬虔な聖職者達が相手であっても、その融通の利かなさに難儀する事があるし、クリスティーナとしては、カラヴィスタワーの処理に関して負い目があるのでやりにくい。

ようやく仕事が一段落したところで、実体化したドラッドノートとドラミナが、必要な書類を受け取る為に連れ立って部屋を出た。

一人になったクリスティーナは、ふと窓の外に目を向ける。

使い魔である不死鳥の幼生ニクスは悠々と空を飛び、通りがかった鴉の雌と何か話をしている。多分、口説いているのだろう。

自由気ままな姿が、ひどく羨ましい。

クリスティーナは執務机の近くに置かれた小さなワゴンから、ガラスのティーポットと白磁のカップを手に取り、甘い香りのするフラワーティーを注ぐ。

執務机の上にティーセットが置かれていないのは、中身を零して机の上の書類を濡らさない配慮だ。

口から鼻へと広がる花の香りに、張り詰めていた神経が解れて、クリスティーナは細く息を吐き出しながら椅子に背中を預ける。

「ふう、このままではお尻と椅子がくっついてしまいそうだな。ドラミナさんは今が一番忙しい時期で、人材が揃えばもっと自由に使える時間が増えると言ってくれたけれど、どうなる事やら……。その忙しい時期は、私が思うよりも長くなるかもしれないとも言っていたしなあ……」

ベルン領はもう、放っておいても人や物やお金が集まるようになっていく。

しかし、今後の『暗黒の荒野』へ向けての開拓事業や、モレス山脈の異種族との交流を踏まえると、座して待っていられる状況ではない。

アークレスト王国各地に埋もれている有能な人材や、生まれてくる時代を間違えて奇人変人扱いされている才人達の発掘も、お金に糸目をつけずに行なっている。

常に新しい仕事舞い込んでくるばかりでなく、自分達でも仕事を増やしている状況である為、クリスティーナは毎日かなりの時間を机から離れられずに過ごしていた。

「ん、ん。別にこの仕事が嫌なわけではないし、不満があるのとも少し違うが、去年のように

ドランやセリナ達と一緒に、色んなところに行つた時の事をどうしても思い出してしまうな。行く先々で命懸けの戦いに巻き込まれてはいたが、今となつては良い思い出だ。それが無理でも、せめて視察という名目でベルン村の中を毎日見て回るくらいは許されていいと思うなあ」

クリステイーナはカップをワゴンに戻すと、瞼を閉じて座っている椅子をぐるぐると回転させはじめた。

あまり褒められた事ではないが、クリステイーナは行儀の悪いこの行動が、気分転換する時の癖になりつつあった。

もちろん、他の人の目がある時には自重しているが。

「はあ、それに、いい加減ドランとの関係も進めないと、セリナやディアドラだけじゃなく、ドラミナさんからの視線も時々怖いのが混じるようになってるし……」

ゆっくりと回転椅子を回すクリステイーナの瞼の裏には、ドランのお嫁さん候補達の綺麗な——しかしそれに比例して怖い目をした——顔が浮かぶ。

クリステイーナもお嫁さん候補の一人なのだが、彼女だけは他の三名とは異なる事情を抱えているのが問題だった。

アークレスト王国における身分において、ベルン領で最も高い身分にあるのはクリステイーナである。

男爵位を持つ貴族として、クリステイーナがドランと夫婦になる際に「二番目以降」では、体裁

が悪い。

そんな事を気にするのか、という声上がるかもしれないが、外聞を考慮しなければ、自ら軋轢や風評被害が生まれかねない。

クリステイーナはもちろん、ドランもセリナもディアドラもドラミナも、全員がベルンの地に骨を埋める覚悟を固めているのだから、決して疎かには出来ない問題なのだ。

さて、ドランがクリステイーナの興したベルン家に婿入りする形になるのは、当事者達の間では合意が取れている。

しかし、婚約した順番では先のドラミナやセリナは、口では気にしていないと言いつつも、心の奥底には大なり小なり引かかるものがあつた。これは心を持つ生き物である以上仕方ない事であらう。

女性陣全員がそれを自覚し、自制出来る理性の持ち主である事と、お互いの心情を察して思いやれる心の余裕を併せ持っていたのが、ドランにとっては大いに救いであつた。

「いざ結婚するとなると、アルマディアの父上や母上にも知らせなければならぬだろうし、ドランのご家族に改めて挨拶をしないと……ううむ、緊張する。緊張するな、緊張するぞ。ああ、ドランに結婚を申し込む言葉も考えないと……というか、いい加減決めないと。流石にこればかりはドラミナさんに頼るわけにはいかないしなあ」

クリステイーナはぐるぐると椅子を回転させるのをやめて、執務机に肘を突いて両手の指を組む。



「ああもう……ドラン、結婚して」

ポロリと弱音と本音の混ざった言葉が零れ落ちた。

下手に言葉を飾るよりも、率直に頼むのが一番ではないか。知恵熱が出そうなくらいに考えこんだクリスティーナは、これ以上ないほど簡潔に、自分の想いを口にしていった。

問題は、この言葉を面と向かってドランに伝える勇気がないという一点にある。このままではクリスティーナがドランに結婚を申し込むのは、一体いつになるのか。

こればかりは彼女を主と仰ぐドラッドノートも、変なところ^{あお}で勇者セムトと同じ「ヘタレ」だな……と、呆れていた。

このように内心でヤキモキしていたドラッドノートは、クリスティーナが椅子を回転させている間に「彼」が入室してきたのを、念話で伝えずにあえて主人に黙っておいた。

そして、この判断はドラッドノートの思惑通りの効果を発揮^{はっき}する。

「いいよ」

短い肯定の返事は、クリスティーナの気付かぬうちに執務室に入室していたドランの口から出たものだ。

ドランの手には追加の報告書類の束が握られていて、仕事の用件で足を運んだようだが、彼もまさか仕事の最中に結婚を申し込まれるとは思わなかっただろう。

クリスティーナはドランの声に気付き、電光石火の速さで顔を上げる。

そこには微笑むドランの顔があり、親愛の情を無限に込められた目が向けられていた。

クリステイーナは紡ぐべき言葉を忘れてしばし呆然としてしまう。

「ふむ、それにしても、この状況で結婚を申し込まれるとは……いささか意外だった。でも、ようやくクリステイーナさんが口にくれたのだから、素直に受け入れれないとな。とても嬉しいよ」

「ち、違——ドラン、いいい、今のは違わないけど、違うというか、あのその……」

珍しくはにかむドランの顔を見ていると、クリステイーナはどうしても今の告白は間違いだっただけと告げられなかった。彼女は腰を浮かせてあたふたと怪しげな動きをする事しか出来なくなってしまう。

ドランはその間にクリステイーナへと近づき、机の上に置かれている追加書類用の棚に持ってきた書類を入れた。

「さて、当事者の私が言うのもなんだが、領主の結婚となると、我がベルン男爵領が始まってから、最大の祝い事になるね。なるべく縁起の良い日を見繕って、式の日取りを決めないと。それに、どこで式を挙げるのかは各教団との関係を踏まえて考えないといけないかな。私としては近しい人達を集めて慎重にするのが好みだけれど、お互いの立場を考えるとそうもいかなくなるのが悩みどころだね」

友人である大地母神マイラルや、始原の七竜としての妹であるアレキサンダー達の名前を嬉しそうに呟くドラン。

そんな彼の顔を見ると、クリステイーナはますます何も言えなくなってしまう。

（いやいやいやいや、これでいいのか、私。さっきの言葉がドランへの告白の言葉でいいのか、クリステイーナ!? でも、正直、もう一度きちんとドランに告白し直すというのは、ものすごく勇気がいるし、今更告白を撤回なんて出来ないし……。これでセリナ達から急かされる視線と圧力を向けられる事もなくなるなら……）

このようにクリステイーナの内心では激しい葛藤が繰り返り広げられていた。結局のところ、ドラッドノートが「ヘタレ」と評した通り、クリステイーナは撤回の言葉を告げる事が出来ぬままに、話が進むのを黙って聞いているだけだった。

「ついつい熱が入って色々と言ったけれど、皆を交えて話をするべきだろうね。クリステイーナさん、夕食の時にでも今回の話を改めて話したいと思うが、どうかな？」

「へ!? いや、ああ、うん、いいんじゃないかな？」

慌てふためくクリステイーナに、ドランはくすりと小さな笑みを零した。

もっとも、彼とて先程のクリステイーナの呟きが、自分に対して向けて口にくれたものではなく、独り言であると分かっている。それでも、この機会を逃すとこの話が具体化するのとは当分先になるだろうと確信していた為、若干気の毒に思いながらも、結婚の話を進めたのだった。

これでセリナとの結婚に向けても一歩前進したので、彼女の実家であるラミアの里——ジャルラに挨拶に行く日がいよいよ近づいてきた。

ドランがあれこれと考え事をしていると、執務室の扉を慎ましくノックする音がし、慌てた様子のセリナの声が聞こえてくる。

「失礼いたしますー！」

声の調子といつもより速いノックに、どうやら何かあったに違いないと、ドランもクリステイナも思考を切り替える。

戦国乱世を治める統一勢力が興りつつある暗黒の荒野から侵略者の手が伸びたか、あるいはそこから大人数の難民が逃れて来たか。

「クリステイナさん、ドランさん、今、街道を通ってお屋敷に馬車が来ているのですけれど、それが」

一つ息を吞んで間を空けるセリナに、ドランが冷静な声で問い返す。

「ふむ。それが？」

現在王国が保護しているロマル帝国の皇女の双子のアムリアと、そのお供を務める獣人の八千代と風香あたりは訪ねてきてもおかしくはない。しかし、彼女達ならセリナはここまで慌てないだろう。となると……

「あの、王子様とアムリアさん達が馬車で来ています」

その言葉で、ドランとの一件からどうにか落ち着きを取り戻したクリステイナの心臓が、再び大きく跳ねる。

クリステイナとドラン、どちらもスベリオン王子には縁があるが、事前の連絡もなしにやってくるとは、ただ事ではない。

クリステイナは再び机の上で指を組み、今回のスベリオン来訪の意味を考える。

「殿下が？ アムリアさんと一緒とはまた珍しい。ガロアまで転移陣を使ってきたとして、そこからは馬車か。直接ベルン村に来なかったのなら、そこまで緊急の事態ではないのかもしれないな。セリナ、それで殿下たちは今どこにおられるのかな？」

「今は賓客室にお通ししてあります。来訪は内密にと仰せで、馬車もどの家のものか分からないようになさっていました」

「内密の話か。私とドラン、どちらが目的かな」

落ち着いたクリステイナの表情と声からは、先程までの動揺を抑制する事に成功したのが分かる。

少し突けば檻樓が出そうだが、ドランは悪戯心を心の奥の方に沈めて、真面目な顔を拵える。

「すぐに分かるだろうけれど、今のベルンの忙しない状況を把握しておられるのなら、クリステイナさんの負担になるような提案はされなないと思いたいな……」

「西のロマル帝国か、東の轟国との戦への参戦要請か兵力の派遣、物資の提供あたりか？」

クリステイナもドランも王国の貴族である為、王家から武力を求められればそれに応じなければならぬ。

それが貴族階級の義務であるから仕方がないのだが、ない袖は振れないという現実もある。

現状、ベルン男爵領が出兵や物資の供出を命じられても、＼まともな手段＼では大したものを出せない。

しかし……と、クリステイナは思う。個人としての参戦ならば求められる可能性は充分にある。競魔祭での戦いぶりや、邪竜教団アビスドーンを壊滅させた一件などもあり、ベルン男爵領首脳陣の常識はずれの戦闘能力が知られている以上、ないとは言えない。

なにせよ、自国の王太子が来ているのだから、仕事の手を止めて話を聞きに行くしかあるまい。ドランが先陣を切って席を立つ。

「では、三人仲良く殿下達のお顔を拝みに行こうか。それと、クリステイナさん」

「ん、な、何かな？」

クリステイナは、ドランが自分の名前を呼ぶ時に、少しでも口角を吊り上げたのを見て、このまま流してしまおうと思っていた話題が切り出されるのを悟る。

「さっきの話はまた後で、落ち着いた頃にね」

「むぐ、うう、分かったよ」

「???」

セリナは不思議そうに首と尻尾の先端を傾げたが、結局その会話の意味を知る事は出来なかった。

間もなく賓客室に到着したドラン達は、近衛騎士のシャルドを傍に置いてソファに腰掛けるスペリオンと対面した。二人とはすっかり顔馴染みである。

共に来たというアムリアやワンワンこと八千代と、コンコンこと風香達は、別室でディアドラやドラミナが応対中だ。

クリステイナが優雅に一礼して、第一声を発する。

「殿下、ご連絡くださればもっと盛大に歓迎いたしましたものを。いえ、まずは我がベルン男爵領にお越しくださり、ありがとうございます。今、歓待の用意をしておりますので、しばしお待ちくださいませ」

領主である彼女がベルン側では最上位の人間なのだから、スペリオンに一番に話しかけるのは当然だ。

スペリオンとシャルドは、友好的な笑みを浮かべてクリステイナとドランを見る。

この程度の演技などいくらでも出来る王太子達だが、ドラン達に向ける表情に嘘がないのは明らかだ。これも、ドラン達の来歴と素性の成せる業であろう。

スペリオンはクリステイナの挨拶に応え、謝意を表する。

「ベルン男爵、忙しいこの時期に突然訪問してしまいすまない。どうしても直接伝えたい話があったね」

スペリオンの対面にクリステイナが座し、ドランはその右に、セリナは二人の後ろに居場所を

定めた。

アムリア達がこの場に居ない以上は、彼女らには聞かせられない王国の重要な話なのだろうと、この時点で推察出来る。

「殿下自ら——しかも秘密裏に我が領を訪れたとあっては、心して聞かなければなりませんね。それでは、殿下、どのようなご用向きで我がベルンへ？」

「ああ。だがその話をする前に、まずここだけの話であると心してもらいたい。それと、礼を失する問いではあるが、この部屋はいらぬ目や耳に対する備えが充分か、答えてほしい」

普段と変わらぬ爽やかな雰囲気を纏う王太子であるが、心持ち目を細めて問う声には、刃の鋭さが含まれていた。

「ドラン？」

クリステイーナに促され、ドランが答える。

「導師級を何人揃えても透視、盗聴出来ない防諜の魔法を、村と屋敷に何重にも重ねてかけてあります。ロマル帝国自慢の『例の眼』でも、見通せないでしょう。また、この部屋の前にも窓の外にも、誰もおりません。もし大声で話したとしても、それを聞く者はこの部屋に居る者だけとお考えください」

実際、ドランはロマル帝国滞在中に、帝国十二翼将の一人『千里時空眼』アイザによる遠隔透視を受けているが、その全てを遮断してきた実績がある。

いくら『視る』事に関しては最上級の異能といえども、そもそもドランとは立っている場所、見ている次元が違いすぎる。

「その言葉を信じよう。王国最強の魔法使い——『アークウィッチ』メルがあれだけ買っている君の言葉だ。それに、私自身も君の実力を目にしているからね」

スベリオンはお茶で口の中を湿らせてから、ドランをまっすぐに見つめて話を切り出した。

「詳細な日時と場所はまだ伏せるが、近々、秘密裏に高羅斗国からの使者と会談を持つ事になっている。我が国が極秘に高羅斗へ行なっている支援の追加依頼か、それとも表立っての支援要請のどちらかだろう。この対応を陛下より任された」

単純に国家としての格や国力を見れば、轟国の従属国と見做されている高羅斗よりも、アークレスト王国の方が上である。

そのアークレスト王国の王太子がわざわざ出向くとなると、高羅斗からの使者は相当な大物なのだろう。

「頼みたいのは会談当日の私の護衛だ。戦力として、ドランを貸してほしい」

クリステイーナはちらりとドランを見る。

「ドランをですか。彼に離れられるのは辛いところではありますが、殿下の頼みとあっては、断るわけにはまいりません。しかし、我が領の補佐官たる彼を殿下の護衛として連れていく名分が立てられるのですか？」

「陛下にも既に私の希望は伝えてあるし、その為の処置も許可を得ているよ。ドランには、正式に私の麾下の騎士団の一員としての席を用意する」

「以前、殿下がロマル帝国に赴かれた際に、ドランを一時的に近衛騎士団に加えたと耳にしましたが、それをさらに一歩進めた形式になるわけですね」

「ああ、そうなるね。騎士団に所属してもらうといっても、今回みたいな特異な事態に迅速に動いてもらえるようにする為の措置だ。ベルン村から離れるのを強要するものではないから、そこは安心してもらいたい。今後も助力を頼む事もあるかもしれないが、機会はそうありはしмайよ」

近衛騎士団や宮廷の魔法使い達にも護衛を務めるのに適任な人材が居るはずだが、あえてドランを指名したという事は、王太子は高羅斗国との会談を警戒しているのだろう。

高羅斗側が何かを仕掛けてくるのか、それともアークレストと高羅斗の会談を察した第三者——この場合は轟国が最も可能性が高いが——による襲撃か。

しばらく黙って聞いていたドランが、ようやく口を開く。

「……まったく、殿下は私の断れない話を持つてくるのがお上手でいらっしゃる。わざわざ私をお使いになる以上、相手は高羅斗の王太子——確か、響海君様でしたか、その方あたりがお出でになられるのでしょうか。天恵姫と呼ばれる複製人間の運用を主導しておられる方でしたね。その方の命を狙えるような相手が派遣される恐れがあると、覚悟しておけばよろしいですか？」

核心を突いた質問に、スペリオンはお手上げだといわんばかりに両手を上げて苦笑した。肯定の

言葉こそ口にしなかったが、沈黙がその代わりと言ってよかった。

「なるほど、その覚悟を固めておくとしましよう」

ドランはそう言って、小さく肩を竦めた。

いずれにせよ、高羅斗の運用している天恵姫という名前の人造人間と思しき兵器については、確かめる必要があると思っていたのだ。

それを向こうから持つてきてくれるのならば、色々な手間が省ける。ドランはそう前向きに考えていた。

+

古神竜ドラゴンの転生者である私——ドランは、殿下の話を聞いた後、皆と共に、別室でディアドラ達と話をしているアムリアの所へと移動した。

殿下はこのアムリアが不自由なく暮らせるように最大限配慮してくださっているそうだが、変わらず元気にやっているだろうか、友人の一人として気掛かりだ。

崩御したロマル帝国皇帝の娘——秘された双子の片割れというアムリアの出自は、利用しようと考えれば大きな価値を持つ。

ロマル帝国に領土的野心を持つ我が国の王室ならば、彼女の利用価値がなくなるまでは、国賓待

遇で生活の面倒を見るだろう。

陛下と殿下のお二方と直接言葉を交わした時の印象から、仮に王国がアムリアを利用しないと判断を下したとしても、彼女を殺害するような事はしないと、私は思っている。

ロマル帝国の密偵なりなんりの手が届かないような僻地に隠遁させるか、幽閉してそこで生涯を過ごさせるのが妥当なところか。

もしそうになったら、野生の白竜がアムリアを誘拐する事件が発生するだけだ。

ただなんとなく、どうなるにせよ、殿下がアムリアを自分の近くに置いておこうとするのではないかと思う。私の願望混じりの推測だけれども。

殿下の背中を見ながら、そう思うのだった。

「アムリア、八千代、風香、お待たせしたね」

応接室に入るなり、殿下は先程までの緊張感を一切排除した穏やかな声で、アムリアに話しかけた。

「スベリオン様、いいえ、デアドラさんやドラミナさんとお話するのは、とても楽しいですから。ドランさん達とのお話は、もうお済みになられたのですか？」

春物の浅黄色のドレスに身を包んだアムリアは、殿下以上に優しい声で応える。

誰かが傷付けば我が事のように悲しむ慈愛に満ちた少女だと、この声を耳にただけで万人が信じるだろう。

殿下に声を掛けられるまで、彼女達は随分と熱の入った様子で話していたようだ。何しろ、扉の外までアムリア達の楽しげな声が聞こえてきたのだから。

感情表現の豊かな八千代や風香がそうするのに違和感はなかったが、アムリアまで頬を紅潮させて笑っているのを見ると、よほど楽しかったに違いない。

彼女達は、日々変わり続けているベルン村やガロアから続く街道と、そこを行く人々の様子に興味を引かれたようだ。

統治を担う人間の一人としては、アムリア達の笑顔を見てみると、実に誇らしい気持ちになる。まあ、殿下の顔を見えますます顔を輝かせているあたり……おや？　と思うところもある。ふむ、なるほど……

殿下は躊躇せずアムリアの隣に腰掛け、彼女もごく自然にそれを受け入れる。

お菓子を口一杯に頬張っている八千代と風香も、殿下とアムリアの態度にこれといった反応を見せていない。

ふむふむ、どうやら普段から二人はこうらしいな。

シャルドは殿下の背後について、護衛の任を全うする。

アムリア達の相手をしていたデアドラ達は、殿下に挨拶した後、クリスティーナさんと私の為に座る場所を空けてくれた。

「ディアドラ、ドラミナ殿、アムリアと八千代と風香の相手をしてくれてありがとう。三人とも好奇心が強く、城でもあちこちに行きたがったり話を聞きたがったりするのだが、相手は大変ではなかったかな」

殿下の問いかけに、ドラミナが優雅な微笑を浮かべて小さく首を横に振る。

「そのような事はありません。ガロアからベルンまでの道中で、気になった事について尋ねていただくのは、とても有意義なのです。私達の立場からでは気付かない、見えにくいものが見えてきますから。それにアムリアさん達が、お城で大切にされているのがよく分かりました。特に八千代さんや風香さんは、毛並みの艶が大変良くなれていますね」

毛並みを褒められた八千代と風香がはにかみながら顔を見合わせる。

「いやあ、殿下のお心遣いにすっかり甘えてしまって、お恥ずかしい」

「ハチの言う通りで。このままではいかんと、二人揃って一念発起して、騎士団の訓練などに参加させていだいたからまだ良いものの、そうでなかったら、タプタプとお肉が付いていたでござろう」

なるほど、ドラミナの言う通り、八千代と風香の髪の毛はもちろん、耳や尻尾を覆う犬と狐の毛は、窓から差し込む陽光を浴びて艶々と輝きの粒を纏っている。また、二人の衣服は出身地である秋津風だが、以前と違って絹の光沢を持つ、見事な柄のものに変わっていた。

仮にも殿下の賓客として王城に逗留しているのだから、八千代達の人生においてはかつてないほ

ど衣食住が充実しているのかもしれない。

改めて二人の容姿を見ると、ほんの少しふくよかになったかな、と思わないでもなかった。気のせいで済む程度の差異だが。

もともと、二人の年齢と食生活の変化を考えれば、より健康的になったと言うべきだろう。

「自制出来たようで何よりだね。アムリアの護衛役でもある二人が、体が重くて刃を振るえなくなつては、洒落にもならない」

「ドラン殿は手厳しい……と、言いたいところでござるが、まったくもってその通り。アムリア殿の護衛としての務めをきちんと果たせるように、努力は怠らないでござるよ！」

犬人の八千代はフンフンと小さく鼻を鳴らし、耳と尻尾もピクピクと小さく動かす。

……駄目だな、飼い犬が飼い主にはめてもらおうと胸を張っているようにしか見えない。

犬人の種としての性質も多少はあるのかもしれないが、それ以上に彼女の性格が、飼い犬っぽく見せるのだろう。

「君達がアムリアの事を変わらず大切に思っているようで、安心したよ。何しろ私達は仕事が忙しくなっている上に、立场上王城に赴くのは難しい。私達の方からはなかなかアムリア達に会いに行けなくてね」

「ついこの間まで学徒であつたのに、クリステイナ殿は男爵に、ドラン殿はその補佐官となり、セリナ殿やドラミナ殿達もその手伝いをしていてござるものな」

八千代の言葉に頷いて、アムリアが続ける。

「皆さんとお会いするのが難しくなったのは、ハチさんも風香さんも、もちろん私も残念ですけれど、そういった事情があるのでしたら我俣は言えませんね」

どこことなく気落ちしている様子のアムリアを見ると、なんとも言えない罪悪感が胸の内に湧いてくる。

外界から隔離された山中の城に幽閉されて育ったこの少女の精神年齢は、見た目以上に幼い。アムリアとは違う意味で精神年齢の低い八千代と風香とは、とても相性が良いのだろう、きっと。

「アムリアは王城の方で友達は出来ていないのか？ そうするのが難しい環境だろうが……」

「フラウ王女殿下は良くしてくださいませよ。それに殿下の母上も。あとは何人か侍女の方達ともお話をする機会も増えました。ふふ、今ではあの山の中の暮らしが嘘だったかのように思うほどです」

「ふむ、アムリアがそう感じているのなら、これ以上野暮な事は聞くまい。それで、殿下、この後のご予定はどうなっているのですか？ お泊りになられてもいいように、屋敷の部屋を用意してあります」

私の質問に、殿下は申し訳なさそうに首を横に振る。

「心遣い、痛み入る。だが、君に話した件の事で予定が詰まっていますね。大急ぎで城に戻らねばならない。アムリア達もゆっくりしたかっただろうに、すまない」

「いえ、ベルン村に行かれるというお話を聞いて、私が無理を言ってお下とご一緒させていただいたのです。感謝しかしておりませんわ」

「アムリア殿の言われる通りですぞ、殿下。我ら三人、日ごろの衣食住で世話になっているばかりか、このように離れた地に住まう友人を訪ねる事をお許しただいて、心の中の天気は感謝感激の雨模様でござる」

八千代の言葉の選択に首を傾げながら、風香もアムリアに同意を示す。

「ハチの言っている事は、ちと迷走気味でござるが、殿下に感謝しているのは本当でござるから、あんまり気にしないでほしいでござる。それに、ドラン殿のところへもう二度と来られなくなるといってもなし。そう気にしないでいただくのが一番でござる」

三人の言葉を聞いた殿下は、演技などではなく心から安堵した様子で、一度だけ息を吐いた。

ふんむ、どうも殿下はこの三人に嫌われたくないようだ。

下心や二心の類が欠片もない三人であるから、日々化かし合いの政治の世界に身を置く殿下にとっては、清涼剤かあるいは癒やしとも言える存在となっているらしい。

やはり三人の身柄を預けるのに足る方であったな。

殿下とアムリア達が屋敷を出られた後、私達は一旦解散し、それぞれ残っている仕事の処理に向かった。

そんな中、私はクリスティーナさんに声を掛けた。

当然、殿下達が来られる前に二人の間で交わっていた話の続きをする為だ。

私に話しかけられたクリスティーナさんは大仰おほごうなくらいに肩を揺らす。

やはり聞かれていると知らずに口にした一言で結婚が決まるのは思うところがあつたか。

再び執務室で二人きりになって向かい合ったのだが、俯うつむいたままのクリスティーナさんはそわそわして落ち着きがない。

隠せるはずもないのに私の視線から自分の体を隠そうとしているとは、なんとも可愛らしい。

「クリスティーナさん、とても居心地が悪そうだが、有耶無耶うやむやのまままで終わらせられる話ではないからね」

「うう、うん、そうだな」

「聞かれたくないだろうけれど、改めて聞く。私としては全く問題ないけれど、さっきのあの言葉……アレは正直に言つて、クリスティーナさんからすれば独り言だったろう。聞かせるつもりはなかった独り言を私が受け入れてこうなっているが、それでいいのかどうか、本音を聞かせてほしい」

私には、クリスティーナさんが何気なく零したあの一言で充分すぎる。

だが、それはあくまで私の側の話。彼女にとっては不本意なもので、彼女が改めて私に結婚を申し込みなおす事を望んでいるのかどうか、私はそれを確かめずにはいられなかった。

クリスティーナさんは二度、三度と深く息を吸つては吐いてを繰り返し、まっすぐに私の瞳を見つめる。

私は口を閉ざして、彼女の中の覚悟と決意が固まるのを待つ。

「あの時の言葉は嘘ではなかったが、君に伝える為に口にしたものではなかった。だから、改めて伝えたい」

そこで一度言葉を切り、クリスティーナさんははっきりとこう言った。

「ドラン、君を愛している。結婚してほしい。……言葉自体はあんまり変わらないが、想いはたくさん込めたつもりだよ」

言い終えたクリスティーナさんは、はにかんだ笑みを浮かべる。

胸の中につかえていた感情を言葉にして伝えられたのだと、その表情が何より雄弁ゆうべんに語っていた。「私の答えも変わらない。クリスティーナさん、喜んで貴女あなたの申し出を受け入れよう。私ももう少しロマンチックな言い方を考えておけばよかったかな？」

私の答えが変わらない事は分かっていただろうけれど、それでもクリスティーナさんは申し込みを受け入れられた事に安堵したようだ。魂が抜けそうな程に深い吐息を零す。

答えておいてなんだが、今になって私もなんだか落ち着かない気分になってきた。

それはそうだ、何しろ、私はクリスティーナさんと夫婦になる約束を交わしたのだからな。

ふーむ、本当に今更ながら、ふとした拍子に今後の人生を左右する約束を交わしたものだ！

「ドランには実直な言葉の方が似合っているよ。それと、ドラン」

「何かな？」

「せっかく……その、結婚の約束を交わしたのだしね。そろそろクリスティーナさんという他人行儀な呼び方を変えてほしいと私は思うんだ。母は私の事を「クリス」と愛称で呼んでいてね。愛する夫にもそう呼んでほしい」

ふむん、呼び方、呼び方か。これまでずっとクリスティーナさんと呼んでいたが、夫婦の間柄になるのなら呼び方を変えても不自然ではない。何より、クリスティーナさんが望んでいるのなら、断る理由などない。ないが……

「分かった。では、これからはクリスティーナさんではなくクリスと……そう呼ぼう。それにしても、なんというか、意外なくらいに気恥ずかしいな、クリス」

いやはや、自分でも分かるくらいに頬と耳が熱を帯びているな。

いい年をした男が、なんとも初心な反応をしてしまうものだと恥じ入るばかりだが、私に名前を呼ばれたクリスティーナさん——ああいや、クリスも大概であった。

「あ、ああ、ああ、ちょちょ、ちょつと恥ずかしいな。ちょつと、ちょつとだけ」

ちょつとどころではない顔色のクリスは、照れ臭さを隠すように自分の白銀の髪をしきりに弄つ

ていた。

鼠眉目は大いにあるけれど、なんと可愛らしい仕草か！

こうして改めて結婚の申し込みを受け直した私は、殿下からの依頼の件も併せて、その日の夕食の後に身内を集めて伝える事にした。

+

そして夕食の時間。

これまで食事は村のご婦人方に作ってもらっていたが、今は素性の確かな料理人達数名に厨房を任せている。

ベルン村の作物とエンテの森から輸入した茸や香草、果実を用いた料理でお腹を満たした私達は、連れ立って別室に移動した。

セリナ、デアドラ、ドラミナ、リネットの四名を前に、私とクリスは肩を並べて向かい合う。

私とクリスが発している緊張の気配を感じ取り、椅子やソファに腰掛けた他の四人は、これからただならぬ発表があるのだと察した様子だ。

「皆に話がある。まず、今日スペリオン殿下が訪ねてきた用件についてだが、近日中に国内で高羅斗からの使者と殿下が秘密裏に会談を行なうそうだ。その護衛として私を借り受けたいと申し込み

に來られた。私はこれを受け入れ、殿下から正式に日時が伝えられたら、ベルン村を^{しゅったつ}出立する」

セリナ達は真剣な表情で私の話に耳を傾ける。

「また、それに併せて、殿下の騎士団に私の席を設けると言われている。これは殿下が私を動かしやすいようにする措置だそうだ。とはいえ、簡単に私に命令が下される事はないと思う。あくまで私はこのベルン男爵領の補佐官だが、王太子殿下直属の騎士団員としての肩書きがある事は、私達にとっても色々と都合が良いものとなるだろう。今回は、それが大きな報酬と言えなくもないかな」

殿下の護衛を引き受ける件については、既に私とクリスとの間で決定した事項であるから、皆への確認というよりは、これからの予定についての連絡といったところだ。

特に質問は出ないだろうと思ったのだが、セリナがずっと右手を伸ばした。

「何かな、セリナ」

「殿下の護衛をなさるのは分かりましたけれど、ドランさんお一人で行かれるのですか？ 秘密裏の会談という事ですから、あまり人数が多くない方が良いのは分かりますけれど、可能であるのなら私も連れて行ってほしいです！」

「ふむん。シャルド卿^{きやう}と近衛騎士団、魔法師団から何人か護衛に連れて行く^{おこせ}と仰っていたし、あまり数は連れて行けないな。私の他にせいぜい一人か二人……」

「クリステイナさんはこのベルンの領主様ですから、動くわけにはいきませんし、私かディアド

ラさん、ドラミナさん、リネットちゃんの中から誰かを選ぶ形ですな」

連れて行かないという選択肢もあるが、セリナの台詞^{せりふ}を受けた他の三人もすっかり私についてくる気になっているな。

さてさて、会談する相手の事と、決して記録に残らない会談という性質を考えると、誰が適任か。ちらりと傍^{かたわ}らの未来の妻殿に視線を向けると、婚姻発表が少し先送りになったお蔭か、今だけは緊張を忘れて考え込んでいた。これまでは名門貴族の令嬢か学生としての立場から物を言えなかったのが、今では一家門の当主として発言しなければならなくなった為、発言には慎重になっている。

「そうだな。ディアドラさん、セリナ、ドラミナさんは男爵家で正式に役職に就いているし、仕事もある。誤魔化^{ごまか}しようはあるとはいえ、出来るだけ彼女らが動いたという記録は残さない方がいいだろう。となると、元からドランのゴーレムとして登録されているリネットが適任か。彼女なら、ドランと一緒に行動しても不自然な点はない。戦力に関しては、この面子^{めんし}で不安を口にしても無駄だろう」

ふむ、私もこの考えに異論はない。

「リネットは、いつでもマスタードランに従って出かける準備を整えております。リネットがお守りするなど口にするのはおこがましいですが、マスタードランの手となり足となり、耳となり目となり、お役に立って見せましょう」

「リネット本人がこの意気込みであるし、殿下の護衛にはリネットを伴^{ともな}って行くでしょう。帝国に赴いた時のように、リネットには私の従士の真似事をしてもらうのが良さそうだな。いつになるのかはまだ不明だが、これで殿下からの依頼についての話は一段落だ。……さて、殿下の件以外にも、皆に伝えなければならぬ事が一つ出来た。よく耳を澄まして聞いてほしい」

セリナ達は改めて背筋^{せすじ}を伸ばして、話を聞く姿勢を整える。

私はクリスに「私から話そうか？」と視線で問いかけたが、彼女は「いや、私から話すよ」と赤い瞳で答えた。

こうして目を合わせるだけで意思疎通出来る仲というのは、恋人関係の男女でもなかなか居ないのではないか？

思わずそんな事を考えてしまうが、これは惚気^{のろけ}になるだろうか。

「セリナ、ディアドラさん、ドラミナさんには特に聞いてほしい。皆を随分と待たせてしまったが、私もようやく腹が据わった。今日、ドランに正式に婚姻を申し込んだ。その、長らくお待ちして申し訳ない」

クリスが全てを言い終えた後、待っていたのはしばしの沈黙であった。隣に立っている私にまで彼女の心臓の爆発^{せいはく}しそうな鼓動^{こどう}が聞こえるようだ。

張り詰めた静寂^{せいじやく}の時間は、セリナがはあーと長い溜息を吐きながら、全身から力を抜いたのをきっかけに破られた。

セリナは大蛇の下半身をズルズルと床に伸ばしながら、椅子の背もたれに体重を預ける。

「はああ、何のお話かと思つたら、そうですか。うう、やっと言うべきなのでしょうけれど、でも、抜け駆けされたような気にもなつて、ちょっと複雑な部分もあつて……」

脱力するセリナを見て、ディアドラが微笑む。

「セリナは大袈裟^{おおげさ}ねえ。でもこれで表立ってドランと夫婦になる準備を進められるわけね。領主が地元出身の家臣と結婚して事なら、盛大にお祝いするのかしら。エンテの森の皆も顔を出したいでしょうし、ガロア魔法学院の皆も黙ってないだろうから、賑やかになるわね」

ファティマやネルネシア、それにレニアとフェニアさんといった、学友達が集まる機会になるのは、明るい話題だ。

そんな中、ドラミナはセリナ達の話に頷きながらも、真面目な表情でドランに問いかけた。

「その光景が瞼の裏に浮かぶようですね。多くの方から祝っていただけるのは、それだけお二人に人望があるという事です。では、私は少々空気を読まない発言をいたしました。クリステイナさんとドランの結婚となれば、ベルン男爵領にとって非常に大きな慶事^{けいじ}です。場合によっては政治的な一手としても用いる事が出来るでしょう。罪人への恩赦^{おんじょ}とか、減税とかですね。その点はどうお考えで？」

領主の結婚という政治的要素を含む行事の利点か。正直に言えば、私はそこまで深く考えていなかった。

我ながら節操がないとは思いますが、クリスと結婚する事で、順次セリナやディアドラ、ドラミナとも結婚出来るという点にばかり目が行っていた。

ただ、クリスは私よりもっと考えていなかったらしく、ハツとした顔になっている。

彼女からすれば私への告白に対する緊張感で頭がいっぱいだっただろうから、無理もない。

「あ、いや、そうか、そういう風に私とドランの結婚を使う事も出来るのか。ドラミナさんを失望させるようで怖いんだけど、正直、そこまでは考えていなかったよ。そうだな、幸い今は恩赦を与えるような罪人はいないし、これからのベルン男爵領の明るい未来に向けての士気向上の機会にするくらいかな？ 結婚祝いとして村の皆さんに、何かしら贈り物するとか、太っ腹にいくなら男爵領を訪れた者にも何か特典をあげるとか？」

「ふふ、そう緊張した顔をなさらないでください。お二人に厳しい事を言うつもりはありませんから。単にお祝い事として村の皆さんを盛り上げるだけでも、今は充分だと思いますよ。それに、私とセリナさんとディアドラさんの分の式も残っています。こちらは領主の結婚ではありませんが、領主の夫の婚姻ですし、異種族間、人間と魔物間での結婚が公に認められたものであると公表する効果もあります。気楽に考えていきましょう」

「そうか、ドラミナさんにそう言ってもらえると安心出来るな」

クリスの言葉を聞いたドラミナは、悪戯っぽく頬を膨らませる。

「まあ、少しクリスティーナさんに苦手意識を持たれてしまっているようですね」

「いや、私にとっては厳しくも頼りになる教師だからかな？」

「愛をもって指導しているつもりですよ」

「教え子として、その愛は充分に感じていますとも」

「それでしたらようございました。では、次の現実的な話ですが、セリナさん」

ドラミナに話を振られたセリナが姿勢を正す。

「は、はい！」

「クリスティーナさんとの結婚が済めば、次は私達ですから、そろそろセリナさんのご実家の方にも話を通しに行かれた方が良いでしょう？ ご両親がセリナさんの扱いに関して、お許しにならないかとても気掛りです。それを別にしても、ラミアの里はエンテの森を除けば近場では特に大きな異種族の社会ですからね。交流に力を入れる相手であるのは、以前から話し合っていた通りです」

「そうでした、そうでした！ これでドランさんと堂々と夫婦になれると、つつい舞い上がっていましたけれど、パパとママやお友達の皆にドランさんとベルン村の事をお話しないといけないのです！ ドランさん、いつ行きましょう？ というか、クリスティーナさんといつ結婚式を挙げ

るんですか？ 正直、私にとって非常に切実な問題なのですけれども！」

蛇体を伸ばしてこちらに迫るセリナの目には、かつてない力強さが宿っていた。これまで散々お預けを食らっていた分、ようやく宿願を果たせると、セリナは凄まじく発奮して